

病 理 学 講 座

教授：羽野 寛	人体病理学：特に肺・肝の臓器病理学
教授：山口 裕 (病院病理部出向中) (12月1日付退職)	人体病理学：特に腎臓病理学、移植病理学
教授：福永 眞治 (病院病理部出向中)	人体病理学：診断病理、軟部腫瘍、産婦人科領域
准教授：酒田 昭彦 (病院病理部出向中)	人体病理学：特に肝とリンパ網内系の病理
准教授：鈴木 正章	人体病理学：特に泌尿生殖器・乳癌の病理
准教授：池上 雅博 (病院病理部出向中)	人体病理学：特に消化管の病理
准教授：千葉 諭	人体病理学：特に肝・骨髄・循環・膝・胎生形態学の病理
准教授：鷹橋 浩幸	人体病理学：特に泌尿生殖器、分子病理学、診断病理学
講師：菊地 泰 (6月30日付退職)	実験病理学および分子病理学：特に腫瘍学
講師：野村 浩一 (病院病理部出向中)	人体病理学：特に婦人科の病理
講師：金網友木子 (病院病理部出向中)	人体病理学：特に腎組織病理
講師：原田 徹 (病院病理部出向中)	人体病理学：特に肺腫瘍、臓器基本構築

教育・研究概要

I. 腎臓に関する研究

1. ミトコンドリア腎症生検例の組織学的解析を更に行った。顆粒状に腫大する尿細管上皮細胞を Laser microdissection で取り出し、その細胞自身のミトコンドリア異常を検討した。個々の細胞の組織学的病変とミトコンドリア異常が対応すると思われた。

2. 移植腎では髄放線部障害が種々の原因でみられ、主に尿路異常と免疫抑制薬の慢性腎障害で認められた。

3. 慢性拒絶反応腎例には傍尿細管毛細血管に中等度から高度の Peritubular capillaritis と基底膜肥厚がみられ、caveolin-1 陽性内皮の増加がみられた。これらは、慢性拒絶反応の重症度と相関し、内皮の phenotypic change を認めた。

4. IgA 腎症組織分類の国際分類と日本分類は、

そのエビデンスを出すための統計的手法が異なるが、いずれも腎機能予後不良を予測する病理パラメータから成立している。我が国のコホート（厚生省 IgA 腎症分科後ろ向き 研究、政策医療ネットワーク）を用いて Oxford 研究の手法に従って、

1) Oxford 国際分類ならびに日本分類を構成する病理パラメータに関する追試研究を行った。

2) Oxford 国際分類ならびに日本分類の病理診断者間での再現性を高めるため、組織分類を構成している病理パラメータそれぞれの再現性を検証し、組織分類を修正した。

5. 腎細胞癌の症例を集積し、腎癌取扱い規約に沿って所見をとり、組織学的検討を行い、腎細胞癌と腎腺腫との比較を行った。

6. 腎臓の組織計測を行い、白血病では正常に比し、腎臓に有意な器質化を示すことがわかった。

7. 腎生検標本の組織所見と臨床病態の比較検討、移植腎組織における組織病態変化の検討、自己免疫性血管炎症候群の病理組織学的評価方法の検討を行った。

8. 腎組織の三次元的構造解析を行った。正常腎のリンパ管の分布について、連続組織切片を作成し、組織構造を再構築し、形態解析を行った。

II. 肝臓に関する研究

1. 閉塞性黄疸における細胆管増生について、CK7, CK19, hepatocyte の発現を観察して、その起源について追究してきた。CD56 の免疫染色および CK7 と hepatocyte の二重免疫染色を追加して検討した。黄疸の遷延した症例では、通常 hepatocyte しか発現していない肝細胞に CK7 と hepatocyte の共発現がみられることから、この細胞を経由して一部は CK7 のみを発現する細胆管に変化すると考えられた。つまり Progenitor cell を介する indirect transdifferentiation ではなく、肝細胞からの direct transdifferentiation であると結論付けられた。黄疸の改善した症例では、共発現する肝細胞は著しく減少しており、direct transdifferentiation はこの現象もよく説明すると考えられた。

2. ヒト正常肝における門脈路末梢域毛細リンパ管を、連続切片と D2-40 による免疫染色標本を用いて 3 次的に追究し、リンパ管系には役割の違う 2 つの系統があると考えられた。一つは門脈路内で動脈枝に沿うリンパ管系で、これは血圧を下げるために動脈から逸出した血漿成に由来する余剰間質液を導出する役割を持つものと考えられる。もう一つは更に門脈路において産出される種々の反応物質

や炎症細胞をリンパ節まで輸送する役割があるものと考えられた。

3. 昨年同様に脂肪性肝疾患の成立及び進展過程における酸化ストレスの関与について研究した。今年度は肝生検凍結検体を用いて、脱脂せずに、非アルコール性脂肪肝・脂肪性肝炎を対象に、酸化ストレスの分布・程度を、脂肪滴内も含めて、検討した。その結果、DNA 酸化ストレス (8-OHdG, TG) は広範に肝細胞核のみならず細胞質でも陽性であった。脂肪酸化ストレス (HEL) は目立たず、脂肪滴周囲、脂肪滴内いずれも陰性であった。

4. 肝に著変がない 48 例 (0~96 歳) の解剖例の右葉肝組織標本にて肝実質細胞域、門脈域、門脈、動脈、胆管の面積%, 胆管・動脈の外径の頻度/面積, 門脈域 1 個当実質域面積を計測, 検討した。その結果, 肝重量は幼少期に急増, 50 歳頃には減少に転ず。肝実質%は正常は 93.5%以上。門脈域 1 個当実質細胞域面積は平均 0.10cm² で, 年齢に対し比較的一定であった。

5. 肝病変の三次元的構造解析のため, 常染色体優性多発性嚢胞腎 (ADPKD) における肝嚢胞病変について, 連続組織切片を作成し, 組織構造を再構築し形態解析を行った。

6. Nonalcohol steatohepatitis から発生した肝細胞癌の一症例を, 手術材料として経験し, 肝細胞癌および癌の発生母地としての非肝癌細胞 (Nonalcohol steatohepatitis) の組織学的特徴をまとめた。

Ⅲ. 消化管に関する研究

1. 外科的に切除された大腸 pSM 癌 203 病変を用いて, pSM 癌におけるリンパ節転移の危険因子について検索した。特に特殊染色を用いて評価した脈管侵襲と budding で, どちらが有効な危険因子であるかについて検討した。大腸 pSM 癌のリンパ節転移危険因子として, 多変量解析において有意な相関をみた因子は特殊染色を用いてリンパ管侵襲, 静脈侵襲の二因子で, Odds 比は, それぞれ 3.6, 7.5 であった。ロジスティック単変量解析にて, 簇出とリンパ節転移との関係は Odds 比 3.4 と相関を認めた。簇出と特殊染色にて検討したリンパ管侵襲, 静脈侵襲との関係は, Odds 比がそれぞれ 3.9, 2.6 と相関がみられ, 簇出はリンパ管侵襲および静脈侵襲との密接に関係していると考えられた。さらに, 脈管侵襲を特殊染色で検索したモデル (簇出を含むモデル) とそのモデルから簇出を省いたモデルを, Likelihood-ratio test にて検索したところ, 両者の間に優位さを認めなかった。したがって, 実際の診断時

に転移危険因子として簇出を含めたとしても, 診断精度の向上には寄与しないことが判明した。以上の結果により, 特殊染色を施行し, リンパ管侵襲, 静脈侵襲の所見を正確に評価すれば, リンパ節転移の危険因子として簇出を検討する必要がないと考えられた。

Ⅳ. 泌尿生殖器に関する研究

1. 前立腺癌に関する研究を継続して行った。細胞内シグナル伝達における主要タンパクの一つである AKT に注目し, 前癌病変である HGPIN, 微小前立腺癌および臨床癌症例で AKT およびリン酸化 AKT の発現を免疫染色にて検討したところ, リン酸化 AKT の発現は臨床病期, 精嚢浸潤, 臨床的な PSA 再発と関連している事が示された。以上の結果を米国カナダ病理学会にて発表した。

2. 精巣腫瘍の臨床病理学的, 免疫組織学的検討を行った。

Ⅴ. 産婦人科に関する研究

1. 妊娠 12 週未満の早期胎状奇胎の組織学的診断基準について詳細に検討した。

Ⅵ. 乳腺に関する研究

1. 乳腺良悪性境界病変の分析および乳癌のハーセプテストと FISH 法の比較検討を行った。

Ⅶ. その他に関する研究

1. 臓器の構築, 殊に臓側胸膜の基本構築に関する解析を模索中である。CD31, D2-40 といった抗体を用いて, 脈管のあり方を中心に検討していく予定である。

2. 剖検例の椎骨を用い, 椎骨の厚さ, 椎間板の厚さを計測, データベースを作成する。

3. 癌の発生・進展に関連する責任癌抑制遺伝子を検索する目的で, 肝癌と肺癌の人体材料を用いた遺伝子について解析中である。

「点検・評価」

スタッフおよび基本的業務: 業務は教育, 研究, 診断業務である。講座は主として教育, 病院病理部は主として病理診断業務を担っているが, この基本的役割分担は本年も変わらない。平成 21 年 3 月に, 本院病理部講師が退職, 4 月に第三病院病院病理部から本院病理部に講師が異動したため, 平成 21 年 4 月時点でのスタッフの体制は, 病理学講座は, 教授 1 人, 准教授 1 人, 講師 3 人, 助教 2 人, 本院病

理部は准教授1人、講師2人、助教2人のスタッフでスタートした。分院病理部の陣容は、青戸病院病理部は准教授1人、助教1人、第三病院病理部は准教授1人、柏病院病理部は教授1人、講師1人、助教1人となった。これに加えて、4月より後期レジデント1人が本院病理に入り、また9月より1人が助教として採用され、講座から本院病理部に配属となった。一方平成20年6月に講座の講師1人、本院病院病理部助教1人、青戸病院病理部助教1人が退職、12月には柏病院病院病理部教授1人が職を退いたため、何れの施設も大幅な欠員を生ずることになった。そのため引き続き講座のスタッフが本院病理部に診断業務のバックアップに入り、土曜日も3週に1回講座が担当し応援している。また第三病院病院病理部（4月～11月）には週1回、柏病院病院病理部（12月以降）には週2回、講座および病院病理部のスタッフが応援した。昨年度のからの病理医不足が解決されないまま、むしろそれが悪化している状況だが、診断業務に関しては幸いにも病院の理解を得て、青戸、第三病院の病院病理部には外部から臨時に病理医を雇うことが出来、この困難な状況を凌いでいる。本年も後期レジデントでの入局希望者や他施設の病理医からの入局の打診があり、将来に向けて明るい材料となっている。

教育：基本的に昨年度と変わらない。座講については、3年生コース臨床基礎医学Ⅰ、4年生コース臨床医学Ⅰを中心に病理学関連科目の講義が行われた。前者では主に病因病態、炎症、代謝、ヒトの時間生物学、腫瘍などのユニットにおいて病理学関連の講義を受け持った。臨床医学Ⅰは臓器別疾患となるが、多くのユニットに参加して、疾患の病理学的側面について講義し、病理に課せられた責務を果たした。演習、実習関係では大きなものとして、3年ユニット病理学総論実習、4年ユニット病理学各論実習がある。3年生については週1回、4月～7月、後者については週1回、5月にスタートし11月に終了した。実習形式に関しては従来の形式を踏襲、本年も学生をグループ分けして指導する方式を採った。一昨年度から導入したスケッチの評価方法を本年度も実施し、ほぼ期待した通りの効果を得ている。その他、3年症候学演習、研究室配属、選択実習にも参加した。選択実習は選択方法が変更された関係もあり、病理学講座では3フェーズまで学生を取ることとし、例年通りにKursusを中心に行なった。CPCについては、研修医を対象とするCPCに学生が参加するという形式に変わったが、3年生から6年生まで参加し、順調に行なわれた。

病理診断業務および病理解剖：病院病理部では、確実性、迅速性をモットーに病理診断業務を毎日行っており、臨床の要求に応え、医療に一端を支えている。前述の如く本年も人員不足に悩まされたが、病院病理部、講座が協力して大過なく業務を進めてきたことは評価されてよい。特に分院の病院病理部の負担が大きくなったが、スタッフの努力で円滑な業務遂行を行なったことに大きく評価される。病理解剖の数は100体を下回って大分経つが、回復の傾向は見られないのは本年度も同様である。患者さんに対してなされた医療を、総合的に評価できる唯一の機会は病理解剖のみであり、良医の育成を目指す本学にとってはなおさら重要な意味を持つと考えられる。本学にあった剖検から学ぶ姿勢を是非回復させることが必要である。

研究：病理学講座・病院病理部は、本学の伝統である人体病理を中心に研究活動を行っており、適宜分子病理も取り入れている。本年度も各スタッフに業務、研究に関する総括を提出してもらったが、診断業務や教育などの日常業務に時間がとられるという厳しい環境であることが異口同音に記載されている。今後研究時間を捻出するために、若手病理医の育成と共に、合理的な業務遂行のための見直しが必要である。しかしその厳しい環境にあっても、それぞれ研究上の解決すべき問題を明確にして、たとえ進歩が遅くとも地道に課題に取り組む事が大切である。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Fujita H¹⁾, Fujishima H¹⁾, Chida S (Akita Univ), Takahashi K¹⁾, Qi Z¹⁾, Kanetsuna Y, Breyer MD¹⁾, Harris RC¹⁾, Yamada Y¹⁾, Takahashi T (¹Vanderbilt Univ). Reduction of renal superoxide dismutase in progressive diabetic nephropathy. *J Am Soc Nephrol* 2009; 20(6): 1303-13.
- 2) Yamada H, Penney KL (Harvard Univ), Takahashi H, Katoh T (Kumamoto Univ), Yamano Y (Showa Univ), Yamakado M (Mitsui Memorial Hosp), Kimura T, Kuruma H, Kamata Y, Egawa S, Freedman ML (Dana-Farber Cancer Inst). Replication of prostate cancer risk loci in Japanese case-control association study. *J Natl Cancer Inst* 2009; 101(19): 1330-6.
- 3) Kuruma H, Kamata Y, Takahashi H, Igarashi K, Kimura T, Miki K, Miki J, Sasaki H, Hayashi N, Egawa S. Staphylococcal nuclease domain-containing protein 1 as a potential tissue marker for prostate

- cancer. *Am J Pathol* 2009; 174(6) : 2044-50.
- 4) Fukunaga M, Harada T. Pigmented perivascular epithelioid cell tumor of the kidney. *Arch Pathol Lab Med* 2009; 133(12) : 1981-4.
 - 5) Toki D¹⁾, Ishida H¹⁾, Horita S¹⁾, Setoguchi K¹⁾, Yamaguchi Y, Tanabe K¹⁾ (1Tokyo Women's Med Univ). Impact of low-dose rituximab on splenic B cells in ABO-incompatible renal transplant recipients. *Transpl Int* 2009; 22(4) : 447-54.
 - 6) Kennoki T¹⁾, Ishida H¹⁾, Yamaguchi Y, Tanabe K¹⁾ (1Tokyo Women's Med Univ). Proteinuria-reducing effects of tonsillectomy alone in IgA nephropathy recurring after kidney transplantation. *Transplantation* 2009; 88(7) : 935-41.
 - 7) Tsuchiya T¹⁾, Ito S¹⁾, Yamaguchi Y, Moriyama Y¹⁾, Ehara H¹⁾, Deguchi T¹⁾ (1Gifu Univ). Tonsillectomy and steroid pulse therapy for recurrent IgA nephropathy in renal allograft. *Clin Nephrol* 2010; 73(1) : 68-71.
 - 8) Kobayashi A, Goto Y (National Center of Neurology and Psychiatry), Nagata M (Tsukuba Univ), Yamaguchi Y. Granular swollen epithelial cells: a histologic and diagnostic marker for mitochondrial nephropathy. *Am J Surg Pathol* 2010; 34(2) : 262-70.
 - 9) Taneda S¹⁾, Honda K¹⁾, Horita S¹⁾, Tokumoto N¹⁾, Kawashima Y (Toda Chuo General Hosp), Tanabe K¹⁾, Yamaguchi Y, Oda H¹⁾ (1Tokyo Women's Med Univ). Proximal tubule cytoplasmic fibrillary inclusions following kidney transplantation in a patient with a paraproteinemia. *Am J Kidney Dis* 2009; 53(4) : 715-8.
 - 10) Kobayashi H, Shimada Y, Ikegami M, Kawai T, Sakurai K, Urashima T, Iijima M, Fujiwara M, Kaneshiro E, Ohashi T, Eto Y, Ishigaki K¹⁾, Osawa M¹⁾ (1Tokyo Women's Med Univ), Kyosen SO (Universidade Federal de São Paulo), Ida H. Prognostic factors for the late onset Pompe disease with enzyme replacement therapy: from our experience of 4 cases including an autopsy case. *Mol Genet Metab* 2010; 100(1) : 14-9. Epub 2010 Feb 4.
 - 11) Honda K¹⁾, Horita S¹⁾, Toki D¹⁾, Taneda S¹⁾, Nitta K¹⁾, Hattori M¹⁾, Tanabe K¹⁾, Teraoka S¹⁾, Oda H¹⁾ (1Tokyo Women's Med Univ), Yamaguchi Y. De novo membranous nephropathy and antibody-mediated rejection in transplanted kidney. *Clin Transplant* 2010 Mar 4. [Epub ahead of print]
 - 12) Sato N¹⁾, Ohsawa I¹⁾, Takagi M¹⁾, Gohda T¹⁾, Horikoshi S¹⁾, Shirata I¹⁾, Yamaguchi Y, Tomino Y¹⁾ (1Juntendo Univ). Type B insulin resistance syndrome with systemic lupus erythematosus. *Clin Nephrol* 2010; 73(2) : 157-62.
 - 13) Toki D¹⁾, Ishida H¹⁾, Horita S¹⁾, Yamaguchi Y, Tanabe K¹⁾ (1Tokyo Women's Med Univ). Blood group O recipients associated with early graft deterioration in living ABO-incompatible kidney transplantation. *Transplantation* 2009; 88(10) : 1186-93.
 - 14) Nishida H¹⁾, Ishida H¹⁾, Tanaka T (Sapporo Univ), Amano H¹⁾, Omoto K¹⁾, Shirakawa H¹⁾, Shimizu T¹⁾, Iida S¹⁾, Toki D¹⁾, Yamaguchi Y, Tanabe K¹⁾ (1Tokyo Women's Med Univ). Cytomegalovirus infection following renal transplantation in patients administered low-dose rituximab induction therapy. *Transpl Int* 2009; 22(10) : 961-9.
 - 15) Sasaki H, Miki J, Kimura T, Sanuki K, Miki K, Takahashi H, Egawa S. Lateral view dissection of the prostatic-urethral junction to reduce positive apical margin in laparoscopic radical prostatectomy. *Int J Urol* 2009; 16(8) : 664-9.
 - 16) Fukunaga M. Angiosarcoma of the kidney with minute clear cell carcinomas: a case report. *Pathol Res Pract* 2009; 205(5) : 347-51.
 - 17) Fukunaga M. Well-differentiated papillary mesothelioma of the tunica vaginalis: a case report with aspirate cytologic, immunohistochemical, and ultrastructural studies. *Pathol Res Pract* 2010; 206(2) : 105-9.
 - 18) Koyama T, Nimura H, Narimiya N, Mori Y, Ikegami M, Mitsumori N, Yanaga K. Validity of the infrared ray method for sentinel node biopsy in gastric cancer. *Jikeikai Med J* 2009; 56(4) : 57-62.
 - 19) 木村 正, 入江健夫, 荻野展広, 成尾孝一郎, 三枝裕和, 大脇和彦, 岡本友好, 原田 徹, 福田国彦. 肝原 solitary fibrous tumor の 1 例. *日画像医誌* 2009; 27(3) : 178-85.
 - 20) 田中信治 (広島大), 上野秀樹 (防衛大), 樫田博史 (昭和大), 渡邊聡明 (帝京大), 八尾隆史 (順天堂大), 池上雅博, 斎藤裕輔 (市立旭川病院), 味岡洋一 (新潟大). 【大腸 SM 癌内視鏡治療の根治基準をめぐって病理診断の問題点と予後】内視鏡摘除大腸 SM 癌の取り扱いをめぐって. *胃と腸* 2009; 44(8) : 1295-312.
 - 21) 荒井吉則, 郷田憲一, 貝瀬 満, 池上雅博, 田尻久雄. 【十二指腸隆起性病変を見たら】十二指腸隆起性病変アトラス Muco-submucosal Elongated Polyp. *消内視鏡* 2009; 21(10) : 1598-9.
 - 22) 小林裕彦, 池上雅博, 三戸部慈実, 浦島允佳. 大腸粘膜下層浸潤癌のリンパ節転移危険因子の検討. *慈恵医大誌* 2009; 124(3) : 113-26.
 - 23) 島村隆浩¹⁾, 佐藤力弥¹⁾, 野口忠昭¹⁾, 佐々木邦明¹⁾,

- 河野洋一¹⁾, 川村 武¹⁾, 川村統勇 (川村病院), 池上雅博. 大腸内視鏡検査による後腹膜血腫を契機に発症した遅発性大腸穿孔の1例. Gastroenterol Endosc 2009; 51(12): 3092-7.
- 24) 重田聡男¹⁾, 高津光洋¹⁾, 池上雅博, 呂 彩子¹⁾, 景山則正¹⁾, 福永龍繁¹⁾ (東京都監察医務院). Angiodysplasia に起因した結腸穿孔の1剖検例. 法医の実際と研 2009; 52: 97-102.
- 25) 石井宏則, 池上雅博, 小林裕彦, 三戸部慈実, 鈴木麻子. 大腸粘膜下層浸潤癌のリンパ節転移危険因子の検討 特に脈管侵襲と簇出 (budding) の比較検討. 慈恵医大誌 2010; 125(1): 19-32.
- 26) 秋岡祐子¹⁾, 久野正貴¹⁾, 松村英樹¹⁾, 近本裕子¹⁾, 堀田 茂¹⁾, 山口 裕, 服部元史¹⁾ (東女医大). 低形成, 異形成腎に併発した膜性腎症様病変に関する臨床病理検討. 発達腎学会誌 2009; 17(1): 16-20.
- 27) 車 英俊, 鎌田裕子, 鷹橋浩幸, 五十嵐浩二, 木村高弘, 下村達也, 三木健太, 三木 淳, 佐々木裕, 林典宏, 颯川 晋. 新規前立腺癌マーカーSND1 の抗体は免疫染色において臨床的意義のある癌を染め分けることができるか. 泌外 2009; 22(8): 947-50.
- 28) 京田茂也, 武山 浩, 福永真治, 木下智樹, 内田 賢, 森川利昭. 乳腺間質肉腫の一例. 乳癌の臨 2009; 24(5): 651-5.
- 29) 剣木崇文¹⁾, 石田英樹¹⁾, 山口 裕, 田辺一成¹⁾ (東女医大). 腎移植後 IgA 腎症再発に対する扁桃腺摘出のタンパク尿抑制効果についての検討. 腎移植・血管外 2009; 21(1): 17-22.
- 30) 秋岡祐子¹⁾, 倉山亮太¹⁾, 梶保祐子¹⁾, 藤木拓磨¹⁾, 藤井 寛¹⁾, 近本裕子¹⁾, 堀田 茂¹⁾, 鈴木万里¹⁾, 家後理枝¹⁾, 田邊一成¹⁾, 山口 裕, 服部元史¹⁾ (東女医大). プロトコル移植腎生検で間質への Tamm Horsfall 蛋白逸脱を示す症例の検討. 日小児腎不全学会誌 2009; 29: 140-2.
- ## II. 総 説
- 1) 山口 裕. 【腎病理の進歩】腎尿細管間質性病変, 疾患の変遷. 日腎会誌 2009; 51(5): 539-43.
- 2) 鷹橋浩幸. 【前立腺癌の画像診断 診療に必要な共有知識】Gleason grading system (ISUP2005) について. 臨画像 2009; 25(5): 442-51.
- 3) 鷹橋浩幸. 【ノモグラム時代の前立腺病理】稀な癌導管型腺癌の診断上のポイント. 病理と臨 2009; 27(10): 945-52.
- 4) 鷹橋浩幸. 前立腺針生検診断と鑑別疾患. 診断病理 2009; 26(2): 71-83.
- 5) 斎藤彰一, 相原弘之, 二上敏樹, 荒川廣志, 田尻久雄, 池上雅博. 【特殊光観察による内視鏡診断の最前線に迫る!】大腸腫瘍性病変の診断における AFI, NBI の有用性を検討する. G.I. Res 2009; 17(3): 241-8.
- 6) 斎藤彰一, 大谷友彦, 相原弘之, 荒川廣志, 田尻久雄, 池上雅博. 【どうする大腸腫瘍】ポリペクトミー/EMR の基本テクニック ホット・バイオプシーのコツと注意点. 消内視鏡 2009; 21(9): 1399-402.
- 7) 鈴木智貴¹⁾, 桑原義之 (名古屋市立大), 池上雅博, 深尾俊一¹⁾, 小川 了¹⁾, 舟曳純仁¹⁾, 溝口公士¹⁾, 前田祐三¹⁾, 山崎雅彦¹⁾, 横田広子¹⁾, 片岡 誠¹⁾ (中野胃腸病院). 医療の現場から 小腸アミロイドーシスの典型的画像所見について. 現代医 2009; 57(2): 287-93.
- 8) 山口 裕, 金網友木子. 【臓器移植と PTLD】腎移植における PTLD (移植後リンパ増殖症). 移植 2009; 44(4): 325-8.
- 9) 河上牧夫 (聖隷佐倉市民病院), 山田律子, 鈴木正章. 病理診断アトラス 女性生殖器系 2 卵巣・子宮. 東女医大誌 2009; 79(4): 149-64.
- 10) 河上牧夫, 豊田智里 (東女医大), 岩淵 馨, 原田 徹, 鈴木正章. 心筋線維の動的形態平衡と特発性心筋症の形態発生に関する研究. 慈恵医大誌 2009; 124(6): 279-303.
- ## III. 学会発表
- 1) 酒田昭彦, 中山順今, 久保恭仁, 相澤良夫. 脂肪性肝疾患における脂質ならびに DNA 酸化ストレスと形態変化. 第 98 回日本病理学会総会. 京都, 5 月. [日病理学会誌 2009; 98(1): 358]
- 2) 千葉 諭, 高須翔志郎, 武富弘敬, 稲垣卓也, 小峯多雅, 鹿 智恵, 遠藤泰彦, 鈴木正章, 羽野 寛. 解剖例を用いた肝の加齢変化に関する形態計測的研究. 成医会第 76 回例会. 東京, 10 月. [慈恵医大誌 2009; 124(6): 268]
- 3) 鷹橋浩幸. 標的体積の標準化に向けて - 病理・画像対比を中心に -. 第 20 回日本高度放射線外部照射研究会. 仙台, 7 月.
- 4) 舍利弗都々子¹⁾, 長岡 豊¹⁾, 富真嗣陸¹⁾ (佼成病院), 野村浩一, 原田 徹. 乳腺 Microglandular adenosis の 1 例. 第 50 回日本臨床細胞学会総会 (春期大会). 東京, 6 月. [日臨細胞会誌 2009; 48 (Suppl. 1): 282]
- 5) 中山順今, 酒田昭彦, 羽野 寛. 正常肝, 慢性肝炎, 肝硬変におけるリンパ管の変化及びその意義について. 第 98 回日本病理学会総会. 京都, 5 月. [日病理学会誌 2009; 98(1): 358]
- 6) 中野雅貴, 金網友木子, 山口 裕, 羽野 寛. 非アルコール性脂肪肝炎に発生した肝細胞癌の一例. 第 98 回日本病理学会総会. 京都, 5 月. [日病理学会誌 2009; 98(1): 354]

- 7) 金網友木子, 中野雅貴, 山口 裕. 高度の溶血性貧血を来した非マルファン大動脈嚢状中膜壊死. 胸部大動脈瘤の1剖検例. 第98回日本病理学会総会. 京都, 5月. [日病理会誌 2009; 98(1): 290]
- 8) 三戸部慈実, 池上雅博, 田尻久雄. 食道表在癌における組織学的予後因子の検討 特に脈管侵襲を中心に. 第95回日本消化器病学会総会. 札幌, 5月. [日消誌 2009; 106 (臨増): A250]
- 9) 山口 裕, 長田道夫(筑波大), 本田一穂(東女医大), 北村博司(千葉東病院), 金網友木子, 山中宣昭(山中腎臓研究所). IgG4関連腎症の病理学的研究. 第98回日本病理学会総会. 京都, 5月. [日病理会誌 2009; 98(1): 206]
- 10) 山口 裕. 腎尿管間質病変の見方, 考え方. 第52回日本腎臓学会学術総会. 横浜, 6月. [日腎会誌 2009; 51(3): 235]
- 11) 鈴木正章, 長沼 玲, 中山順今, 千葉 諭, 加藤弘之, 河上牧夫, 羽野 寛. 原発不明乳頭状腺癌の淡明細胞型腎細胞癌内転移. 第98回日本病理学会総会. 京都, 5月. [日病理会誌 2009; 98(1): 318]
- 12) 福永真治. A clinicopathologic analysis of partial hydatidiform mole. 第98回日本病理学会総会. 京都, 5月. [日病理会誌 2009; 98(1): 241]
- 13) 福永真治. 宿題報告(3) 胞状奇胎の臨床病理学的研究. 第126回成医会総会. 東京, 10月.
- 14) Fukunaga M. Early complete hydatidiform mole: a clinicopathologic and flow cytometric study of 270 cases. 99th Annual Meeting of United States and Canadian Academy of Pathology. Washington DC, Mar. [Mod Pathol 2010; 23 (Suppl.): 242-3A]
- 15) Fukunaga M. Retroperitoneal lymphangiomyomatosis arising from cystic endometriosis. 22nd European Congress of Pathology and National Congress. Florence, Sept.
- 16) 友利賢太¹⁾, 藤田明彦¹⁾, 吉田清哉¹⁾, 大町貴弘¹⁾, 良元和久¹⁾, 毛利 貴¹⁾, 小山友己¹⁾, 恩田真二¹⁾, 梶本徹也¹⁾(¹富士市立中央病院), 遠藤泰彦. 多発性脳転移を伴った直腸癌の一例. 第71回日本臨床外科学会総会. 京都, 11月. [日臨外会誌 2009; 70(10): 3199]
- 17) 小峯多雅, 稲垣卓也, 永妻啓介, 鹿 智恵, 千葉 諭, 羽野 寛. 炎症, 酸化ストレスから見た慢性肝炎における血管内皮傷害に関する免疫組織学的検討. 第98回日本病理学会総会. 京都, 5月. [日病理会誌 2009; 98(1): 359]
- 18) 鷹橋浩幸. 針生検にて良性腺管と誤診されやすい前立腺癌. 第98回日本病理学会総会. 京都, 5月. [日病理会誌 2009; 98(1): 191]
- 19) 原田 徹, 福永真治, 小池裕人, 池上雅博, 小峯多雅, 千葉 諭, 鈴木正章, 羽野 寛. IgG4関連が疑われた腫瘍形成性膵炎の臨床病理学的検討. 第98回日本病理学会総会. 京都, 5月. [日病理会誌 2009; 98(1): 384]
- 20) 金網友木子, 山口 裕, 小林賛光. 人工弁置換の影響が考えられた, 高度の腎へモジエロシスの2例. 第52回日本腎臓学会学術総会. 横浜, 6月. [日腎会誌 2009; 51(3): 303]

IV. 著 書

- 1) Klatt EC 著, 鷹橋浩幸, 羽野 寛, 白石泰三(三重大), 福田国彦監訳, 池上雅博他翻訳. ロビンス&コトラン 病理学アトラス. 東京:エルゼビア・ジャパン, 2009.
- 2) 福永真治. 第3部:鑑別ポイント 2. CINのグレーディング. 坂本穆彦(杏林大), 安田政実(埼玉医科大)編. 腫瘍病理鑑別診断アトラス 子宮頸癌. 東京:文光堂, 2009. p.126-32.
- 3) 福永真治. VIII. 腫瘍性疾患 B. 間葉系(原発性)腫瘍 16. 類上皮血管内皮腫. 日本臨床別冊:新領域別症候群シリーズ:呼吸器症候群Ⅲ:その他の呼吸器疾患を含めて. 第2版. 大阪:日本臨床社, 2009. p.151-4.
- 4) 鷹橋浩幸. 第2部:組織型と診断の実際 II. 稀な腺癌. 白石泰三(三重大), 森永正二郎(北里研究所病院)編. 腫瘍病理鑑別診断アトラス 前立腺癌. 東京:文光堂, 2009. p.40-9.

V. その他

- 1) 丸山之雄, 西川 元, 横山啓太郎, 宇都宮保典, 大野岩男, 細谷龍男, 佐久間亨, 尾尻博也, 小池裕人, 鈴木正章, 羽野 寛. 難治性MRSA菌血症に感染性心内膜炎を合併した1剖検例. 慈恵医大誌 2009; 124(3): 127-34.
- 2) 河本輝敬¹⁾, 宮田あかね¹⁾, 岡村恵子¹⁾, 青木陽子¹⁾, 小野寺潤子¹⁾, 今川信行¹⁾, 大和竜夫¹⁾, 木村英三¹⁾, 山田隆之¹⁾(¹佼成病院), 野村浩一. 卵巣原発移行上皮癌の1例. 卵巣原発移行上皮癌の1例. 日産婦東京地方会誌 2009; 58(2): 208-14.
- 3) 山根建樹, 内山 幹, 古谷 徹, 石井隆幸, 小村伸朗, 中野雅貴, 深町信介, 諏訪達志, 大草敏史. 十二指腸球部に脱出し同部の潰瘍形成をきたした胃脂肪腫の1例. 日消誌 2009; 106(11): 1643-9.
- 4) 伊藤敬一, 松尾征一郎, 徳田道史, 八木秀憲, 濱田智美, 春木孝一郎, 佐藤伸孝, 南井孝介, 日置美香, 青山尚文, 本郷賢一, 吉村道博. 急性心筋炎と無顆粒球症を合併し, 死後病理解剖にて胸線腫が見つかった1例. 心臓 2010; 42(2): 182-8.

5) 高橋英吾, 権田浩也, 西條広起, 島田淳一, 藤原佑樹, 高橋一彰, 田村久美, 平井健一郎, 野田健太郎, 浮地太郎, 古谷和裕, 柳町麻衣美, 吉田 健, 金月 勇, 黒坂大太郎, 山田昭夫, 羽野 寛, 中山順今. 難治性気胸を合併した皮膚筋炎の1例. 慈恵医大誌 2009; 124(4): 159-67.

ウイルス学講座

教授: 近藤 一博 ウイルス学, 分子生物学

教育・研究概要

I. 教育概要

1. 医学科講義・実習

3年時学生の「ウイルスと感染」の講義を16コマ担当し、ウイルス学の基礎とウイルスと関係する疾患の基礎的な理解のための講義を行なった。実習は、5コマの実習を行なった。講義・実習ともに、将来、医師としてウイルス感染症に対処できるための基礎を学習するとともに、医学者として、原因不明の疾患の研究、新しい感染症の出現、ウイルスを利用した医療に対応できる基礎力をつけられる様に配慮した。本年度からは、「感染免疫テュートリアル」も担当し、テュートリアル形式を通して学生の感染症学への理解を深めることに努めた。

2. 看護学科講義

ウイルス学の講義を6コマ担当した。

3. 看護学校講義

慈恵看護専門学校においてウイルス学の講義を16コマ担当した。

II. 研究概要

講座の研究テーマは、ヘルペスウイルスの研究を通して疾患や生命機能への理解を深めることにある。特にヒトヘルペスウイルス6 (HHV-6) が関係すると思われる、気分障害などの精神疾患の研究、HHV-6やHHV-7を利用したウイルスベクターの開発、ヘルペスウイルスの再活性化研究を通しての疲労の測定法やメカニズムの研究など、臨床応用を見据えた基礎研究を中心に行なっている。具体的な研究テーマは以下のとおりである。

1. HHV-6 潜伏感染研究を通じた、疲労のメカニズムの研究

疲労の蓄積は様々な疾患の引き金になるだけでなく、過労死を引き起こすこともまれではない。「疲労感」は、痛み、発熱、眠気と同様に生体を守る大切なシグナルである。ところが、「疲労感」は比較的曖昧な感覚で、報酬や達成感といった要素によって減殺されてしまう他、人によって疲労を感じる度合いには大きな差がある。この様な問題を解決するためには、疲労のメカニズムを解明して、疲労を客観的に定量、評価することが必要である。しかし、これまで、「疲労」が生じる機序や、人が「疲労」